

今日は聖霊降臨日です。ギリシャ語では、ペンテコステと言いますが、五十日目という意味です。だから五旬祭というわけです。今日の使徒言行録の最初に「五旬祭の日が来て」という書き出しでお話がかかっていますが、元々このペンテコステは、ユダヤ人のお祭りでした。

皆さんご存知のように、ユダヤ人にとって、一番大きなお祭りは、過ぎ越しの祭です。長い間、エジプトで奴隷の生活をしてきたユダヤ人の先祖、イスラエル民族が、モーセの指導でエジプトを脱出するという出来事がありました。それを記念する、自分たちの存在の根拠を明らかにするお祭です。

その日から、五十日過ぎた日のお祭り、というのがこの五旬祭です。それでは、このお祭りでユダヤ人は何を祝ったか、たとえば、エジプトを脱出したイスラエルの民族が、荒野を歩いてシナイ山に到着し、そこで神様から十戒に代表される律法を授かったことを祝う日です。

そのような歴史的な出来事と同時に、この日は、夏のはじめに収穫する小麦の収穫祭という特色がありました。聖書的には律法をいただいた祭りですが、一年間の農業歳時記としては、小麦の収穫祭なんですね。聖書の信仰というのは、元々農耕民族や遊牧民族が行っていた宗教的儀式に、歴史的な出来事を結びつけて、自分たちの信仰を確認するような意味を加えて行った、という特色があります。

農耕民族は、収穫祭などでは、一年の苦労を忘れるために、お酒を浴びるように飲んだりして、性的、倫理道徳的にも、このお祭りの間は大変乱れた習慣があったようです。これを一言でいうなら、「我を忘れる祭り」と言ってもいいかもしれません。

しかし、聖書の信仰は、このような歴史的な出来事に従って祝う祭りによって、「我を忘れる祭り」ではなく、「我を思い出す祭り」を行っている、と言えるのではないのでしょうか。

過ぎ越しの祭りで、苦しいエジプトでの奴隷生活から解放されたことを思い出したユダヤ人たちは、五旬祭では、シナイ山で自分たちの生活の規範である十戒などの律法を与えられたことを思い出し、感謝するのです。

その聖書を受け継いだ、私たちキリスト教会も、このユダヤ人のお祭りを、自分たちの信仰の歴史と結び付けて思い出す祭りをしています。過ぎ越しの祭りは、イエス様の十字架の犠牲と復活。そして五旬祭は聖霊の降臨ということ、つまり教会の誕生ということを祝うのです。

ところで、聖霊降臨の日に、どんなことがあったのか、改めて考えてみましょう。

ユダヤ人がみんな、モーセの律法が与えられたことを祝うためにエルサレムに集まっている時、弟子たちも家の中で集まっていました。すると激しい風とともに、炎のような聖霊が、弟子たちひとりひとりの上に降って、急に、今まで行ったこともない外国の言葉を話し出した、というのです。エルサレムには、世界中から、五旬祭を祝うために、外国に住むユダヤ人などが来ていたのに、その人たちが、自分たちの日頃しゃべっている言葉で、弟子たちが説教しているのを聞いて、驚いた、というお話です。

もし、これが表現されているとおりの、そのままのことが起こったなら、もう私たちは高いお金を払って、英会話教室なんかに行く必要はなくなります。聖霊が外国語を教えてくれるからです。

しかし、注解書などを読みますと、わたしたちをがっかりさせるようなことが書かれていました。

この祭りに集まった人々は、そのほとんどがユダヤ人あるいは、ユダヤ教に改宗した人々です。当時エルサレムに集まった人々は、ユダヤ人が母国語として話しているヘブライ語（正式には、アラム語という言葉なのですが、新約聖書では、この言葉がヘブライ語と紹介されている）とギリシャ語を話していたようです。ですから、沢山の出身地の名前が出てきますが、実際は、この二つの言葉があれば、みんなその話している内容を理解できたらしいのです。

それじゃ、どうして、この書物を書いたルカは、これを奇跡のように表現したのでしょうか。

このルカは、直接この現象を目撃したわけではありません。彼自身は、後にキリスト教の伝道者になったパウロという人の弟子です。しかも、外国人。ルカはこの五旬祭の出来事を、あとから12弟子か、他のクリスチャンから聞いて、奇跡のように書き残したのだと思います。

可能性としては、弟子たちが、恍惚状態になって、誰にもわからないような異言を語ったか、あるいは、ギリシャ語で話したか、だろうと私は思います。

もし、異言を語っていたのなら、聞いている人々は異様なありさまに驚き、あるいはバカにする人もいたのではないかと、思います。

今日の使徒言行録は、11節で終わっています。人々の驚きの言葉で終わっているのですが、それに続く部分、12節13節では、

『人々は皆驚き、とまどい、「いったいこれはどういうことなのだろうか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。』

もし弟子たちが異言を語ったなら、このような反応が出て当然でしょう。

あるいは、弟子たちはギリシャ語で、エルサレムに集まった人々に語りかけたのではないかと、とも思います。ヘブライ語しか理解できない人々には、弟子たちの発言が、異言のように思えたのでしょう。しかし、異邦人であるルカのような立場の人からすれば、弟子たちが、自分たちの理解できることばで、イエス様の話を語ったんだ、ということではないかと、思うのです。私たちが外国で、わからない言葉を語る人々の間にいて、急に日本語を聞いたら、とても気持ちよく耳に入ってくると思うのです。

奇跡物語の場合、それを受け止めるのには、3つの立場があります。

一つは、そんなことは全く起こらなかった、作り話だ、という立場。これでは全く奇跡物語は無意味なものになってしまいます。

もう一つは、全くその通りのことが起こった、という立場。これなら、奇跡に意味があるのですが、科学的には、説明できず、受け入れられない立場、ということになります。

そして、三つ目の立場ですが、それは、その言葉のままのことが起こったわけではないが、そのように表現することで、なにか別の大切なことをたとえている、ということです。私は、この第三の立場から聖書の奇跡物語を見るのが正しいのではないかと、思います。

この五旬祭の日、世界中から集まった種々雑多な人々は、一生のうちではじめて、自分たちに理解できて、まっすぐ心に入ってくるやり方で、弟子たちの口から、神様の偉大な業の話を聞いた、ということではないか、と思うのです。

現代において、私たちは、昔の人々にだけ理解できた古い聖書の言葉を、何とかすつと心に入る分かりやすい言葉で語る、ということではできないか、それを今、教会は求められている。それが出来るとき、本当の意味で、聖霊が私たちの上に働いている、ということになると思います。

10年ほど前の教役者会。私と李相寅司祭が担当でしたが、直前の日曜日に各自が行った説教を持ち寄り、全員に配って、その中で二人が自分の説教を読んで、それについて各自が感想を述べるような学びの時を持ったことがあります。帰ってからも、それぞれの説教を読みましたが、スッキリわかりやすい説教もあれば、長々と書いているのに何が言いたいのか理解が困難なものなど、さまざまでした。

そんな中で、退職したベテランの司祭が、日曜日の説教をするまでに、何度も言葉を直しながら文章を作っている話をされました。そのような作業をするうちに、その内容を覚えて、会衆を見ながらでも、話しの内容がぶれずに、最後まで本筋から外れないで話せる、という体験を語られました。その人の説教を読むと、なるほど、良く言葉が練られて、わかりやすく心にスッと入ってきます。

パウロは、自分には異言を語る力があっても、それより、わずかな言葉でも相手に分かる言葉を話す、と言っています。

『わたしは、あなたがたのだれよりも多くの異言を語れることを、神に感謝します。しかし、わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一万の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方をとります。』（Iコリント14：18～19）

また、コロサイの信徒への手紙では、『いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。』（コロサイ4：6）とも言っています。

聖霊が働く、とは、聞いている相手の心に響くような、打てば響くような話ができることではないかと私は思うのです。

説教に限らず、私たちの交わす言葉が、聖霊によってきよめられ、相手に伝わる言葉になるように、聖霊の励ましを祈りたいと思います。